

横浜のマッカーサー

連合国軍最高司令官マッカーサー元帥は、一九四五（昭和二〇）年八月三〇日に厚木飛行場に降り立った後、直ちに横浜に入った。それから九月一七日に東京に移るまで、マッカーサーは横浜に滞在する。なぜマッカーサーは横浜にやって来たのだろうか、そして横浜でマッカーサーは何をしていたのだろうか。横浜のマッカーサーを再現してみたい。

日本の降伏と占領

一九四五年四月、米太平洋陸軍（USAFPAAC）の総司令官に任命されたマッカーサー元帥は、八月一日に日本が無条件降伏すると、正式に連合国軍最高司令官（SCAP）に任命され、日本占領の全責任を負うことになった。

マニラに派遣された日本陸海軍の代表、いわゆるマニラ使節団は、降伏文書の他に四点にわたる要求事項を受け取って帰国する。このとき示された第一次進駐区域に東京は含まれず、多摩川以南が指定されていた。占領軍の東京進駐は、少なくとも第一次の段階では想定されていなかったのである。占領軍の拠点となる「総司令部区域」についても、場所は特定されていない。では、なぜマッカーサーは横浜に入り、一時とはいえ横浜に総司令部が



厚木飛行場に着陸したパターン号のタラップでポーズをとるマッカーサー 1945年8月30日 (米国国立公文書館所蔵)

設営委員会を設置、二六日には外務省外局として終戦連絡中央事務局を設置した。さらに三〇日にはその出先機関として横浜終戦連絡委員会が県庁内に設けられ、これは九月二二日に終戦連絡横浜事務局に改組される。この間、受入準備を命じられた神奈川県は、まさに不眠不休で準備を進める。

米軍が要求していたのは、最高司令官のための「相当ノ造作ト家具」を備えた住宅、一〇名程の将官用の「相当ノ造作及家具ヲ有シ最高司令官住宅ノ近隣ニアル適当ナル住宅」、六〇〇名の士官

置かれることになったのか。当時帝國ホテルの社長だった犬丸徹三によると、外務省からマッカーサーらの宿舎について相談を受けた犬丸が横浜のホテルニューグランドを推薦したのだという（『ホテルと共に七〇年』展望社、一九六四年）。米軍は宿舎と司令部は「一区域」に所在すべきと指定していたため、必然的に横浜が「総司令部区域」となった。つまり、犬丸の提案がきっかけで、横浜に決定したわけである。ただし、米軍側は、総司令部の横浜駐留を一時的なものと考えていたと思われ、横浜進駐直後から東京移転の準備が進められている。

マニラ会談により、二八日に厚木から横浜への進駐が決定して、政府および神奈川県は受入準備に追われる。政府は八月二二日に横浜地区占領軍受入



宿舎のホテル・ニューグランドを出るマッカーサー 1945年8月31日 (米国国立公文書館所蔵)

のためのホテルまたは宿舎、そして二三〇〇名の兵員宿舎、さらに司令部用の建物、倉庫、一五〇台の乗用車、バス二五台、トラック五〇台であった。浴室・トイレの完備も、当然要求されていた（江藤淳『占領史録』第一巻、講談社、一九八一年）。

関係者は胸をなで下ろした。横浜では、占領軍に提供する建物の選定や自動車の準備を終え、二七日には宿舎の割り当てが発表された（『読売報知』八月二八日）。最高司令官宿舎にはマイヤー邸、将官用にはクライヤー邸他、士官宿舎に香港上海銀行、ホテルニューグランド、ヘルムハウスなど、そして兵員宿舎として生糸検査所などが割り当てられた。総司令部は、税関庁舎が予定されていた。

空襲の被害で止まっていた電気・ガス・水道の復旧が急がれ、また、提供予定の建物を使用していた人々は、一両日の内に退去を求められた。そして、退去後には学生・生徒を連日三〇〇〇人以上動員しての清掃が行われた（『朝日新聞』一九四五年八月二八日）。宿舎用のベッドも関東一円の病院から調達したが、これは占領軍進駐後にサイズが合わずほとんど廃棄されたという（『神奈川県警察史』下巻、一九七四年）。一方、厚木飛行場でも、滑走路の整

備や宿舎用の建物の準備などが急がれていた。そんななか、先遣隊の到着を翌日に控えた二五日夜、進駐の日程を四八時間延期する旨の電報がマニラから届く。台風の影響に加え、米軍が日本側の準備不足を考慮したからともいわれる。ともかく、厚木でも横浜でも

以下占領軍の先遣隊が到着し、ここで初めて米軍側は準備状況の報告を受け足した。この間も、横浜・厚木での受入準備は夜を徹して続けられている。総司令部に予定されていた税関でも、泊まり込みで清掃などの作業が行われた。そして、ようやく二九日中に、宿舍の準備は完了する。税関の出入り口には、「進駐軍司令部」の看板が掲げられた（『毎日新聞』神奈川版、八月三〇日）

厚木到着

こうして四八時間延期のおかげで準備がようやく整った三〇日、マッカーサーを迎えることになる。この日のマッカーサーらの到着時間については、諸説がある。新聞の報道や証言もまちまちである。

本土進駐の主力であった米第八軍の「オキユペーショナル・モノグラフ」



厚木飛行場に降り立ったマッカーサーは記者団に取り囲まれた
1945年8月30日
(米国国立公文書館所蔵)

によると、第一一空挺師団の一番機が着陸したのは午前六時、そのおよそ六時間後というから一二時頃に第八軍司令官アイケルバーガー中将が到着したとされている。そして、マッカーサーが到着したのは、「正確に一四時一分」だと記している。日本の新聞報道では、一四時五分となっている（『朝日新聞』『読売報知』八月三一日）。

さて、この間にも第一一空挺師団の兵士一三〇〇人が厚木に降り立っていた。そして、師団長スウィング少将から日本側に、今後の予定についての説明があった。マッカーサーの宿舍は、当面ホテルニューグランドとすることが決定されていた。また、マッカーサーは日本政府代表の迎えは受けず、直ちに横浜に向かう旨も伝えられた。横浜に向かう経路については、多少の議論があった。米軍側は厚木街道をまっすぐ横浜に向かう経路を主張したが、結局日本側が準備していた通り、長後にいったん南下し、そこから東進して戸塚で国道一号線に入るといふ経路に決定した。一時には、先遣部隊五〇人程が横浜に入ったという。

そして、一四時過ぎマッカーサーの到着を迎える。マッカーサーの専用機C54バターン号が着陸し、マッカーサーはそのタラップでポーズをとった。第一一空挺師団の軍楽隊の演奏が、これを出迎えた。タラップを降りたマッカーサーにアイケルバーガーが歩み寄ると、マッカーサーは「ボブ、これで終わったな (This is the party)」と声をかけたという。この後、記者団に囲まれたマッカーサーは、用意してきた有名な声明を読み上げた。

横浜進駐

同乗した。このリンカーンは、陸軍大臣の専用車で、南方で日本軍が押収したものだといった（河原匡喜『マッカーサーが来た日』新人物往来社、一九九五年）。

日本の消防車がサイレンを鳴らして先導し、マッカーサーの車列は出発した。マッカーサーのリンカーンの前後を米軍将校らの自動車を守り、さらに日本の憲兵や警官が護衛についた。一行の総勢は、乗用車二五台、トラック一〇台であったという（『読売報知』八月三一日）。先頭を行く消防車は、途中でタイヤがパンクして車列を離れ、警察官の乗る先駆車が以後横浜まで先導することになった（『神奈川県警察史』下巻）。

冒頭、「メルボルンから東京までは長い道のりだった。長い長いそして困難な道程だった。しかしこれで万事終わったよ。うだ。」と述べた後、日本軍の降伏と武装解除が順調に進んでいることに満足している旨を表明した（『朝日新聞』八月三一日）。そして、マッカーサーはすぐに日本側が用意した乗用車リンカーンに乗って、横浜に向かう。アイケルバーガーも

沿道には、警備する警官や小銃を持った憲兵が並んでいた。これを見た米軍士官の指示で、憲兵は後ろ向きに廻り右をさせられたという（『神奈川県警察史』下巻）。一般の日本人は、ほとんど沿道に出ていなかった。米軍側は、いつ「キリコミ」や、銃の発砲があるかと緊張し、警備に当たる士官や兵士は臨戦態勢であった。しかし、先のパンク以外何事もなく車列は横浜に入り、国道一号から桜木町駅前を通って海岸通りに入り、ホテルニューグランドに到着した。マッカーサーは、三一五号室に入り、以後九月二日まで三一六号室・三一七号

室とあわせて三室を居室とした。実は、マッカーサーがホテルニューグランドに泊まるのは二度目であった。一九三七年に、夫人と共に宿泊していたのである（白土秀次『ホテル・ニューグランド五〇年史』一九七七年）。マッカーサー自身がそのことに気がついていた様子は、伝えられていない。

ホテルニューグランドはたちまち、満杯となった。総司令部や第八軍の関係者に加えて、従軍記者も含まれていた。記者のなかには、三〇日に早速東京入りを果たした者もある（『読売報知』八月三十一日）。一般兵士は、当初山下公園に募営したらしい（『読売報知』九月一日）。この日から、大岡川・派大岡川・堀川に囲まれたいわゆる「関内」区域が、米軍の警戒領域となり、弁天橋・港橋・前田橋など各橋に検問

が設けられ、第一一空挺師団の兵士が警戒に当たった。

この間、上陸予定の大棧橋の整備や通信線の敷設など、米軍は着々と設営・準備を進めていた。

マッカーサーは三十一日朝に総司令部に入り、本格的に業務を開始した（『読売報知』九月一日）。この日、マッカーサーはできるだけ早く東京へ移動し、夫人と息子を呼び寄せたいと、アイケルバーガーに語ったという（児島襄『日本占領』第一巻、文藝春秋社、一九七八年）。三十一日発の外電は、近く総司令部が東京の米国大使館に移るといふ観測を報じていた。九月一日には、共に日本軍の捕虜となっていたパーシバル將軍とウェンライト將軍が、ホテルニューグランドに入る（『読売報知』九月二日）。マッカーサーの

出が施されていたのである。

マッカーサーがこの日の午後三時頃、鎌倉の鶴岡八幡宮を訪れたという報道がある。『読売報知』だけが、しかも一八日になって報じたものだが、宮司の証言などもあり、事実と考えてよいだろう。

占領方針

この間に横浜港大棧橋では、一一時頃から第一騎兵師団の上陸が始まった。先に横浜に入っていた第一一空挺師団の軍楽隊が、これを出迎えた。上陸後の第一騎兵師団は相模原に集結した後、東京に向かうことになる。

他方、この日の夕方には、重要な動きがあった。横浜終戦連絡委員会の鈴木九万がマーシャル参謀副長に呼ばれ、マッカーサー名で日本国民に発す

る予定の三種の布告文を提示された。それは、日本政府の一切の権能は連合国軍最高司令官の権力下に行使され、その間英語を公用語とする、占領政策に違反した者は軍事裁判で裁かれる、軍票を使用する、といった直接軍政を意味する内容であった。日本側の必死の働きかけにより、翌三日に重光外相がマッカーサーと総司令部で会談し、布告文の公表は中止された。そして、日本政府に対して占領政策の実行を命ずる命令文を発することで決着したのである。こうして直接軍政は、表面的には後退したことになった。

また、二日夕方五時頃にマッカーサーは、アイケルバーガーを呼び、すでに上陸・進駐していた第一一空挺師団や海兵隊の兵士による暴行事件などについて話し合った。この日から、マッカーサーは宿舎を山手のマイヤー邸に移した。降伏調印式出席から鎌倉行き、夕方には横浜に戻り、宿舎を移す、そしてこの間にも布告文をめぐる日米の交渉があり、その報告も受けていたであろう。マッカーサーにとって、あわただしい一日であった。

四日・五日と、マッカーサーの動静は伝えられていない。ただ、マッカーサーと総司令部の東京移転の準備は着々と進められていた。三日には、マーシャルが東京に入り、米国大使館や帝國ホテルなどを検分している（『読売報知』九月四日）。

米軍部隊も続々上陸・進駐し、横浜



降伏調印式に向かうためホテルニューグランド前でリンカーンに乗り込むマッカーサー 1945年9月2日
横浜の空襲と戦災関連資料(原島真一氏提供)



戦艦ミズーリ艦上の降伏調印式で演説するマッカーサー 背後にペリー艦隊の星条旗が見える
1945年9月2日
(米国立公文書館所蔵)

配慮によって、翌日の降伏調印式に出席するためであった。

翌二日早朝、マッカーサーをはじめ連合国の代表らは、大棧橋から駆逐艦に乗って浦賀沖に停泊する戦艦ミズーリに向かう。日本側代表の重光外相と梅津美治郎参謀総長らも、米軍差し向けの駆逐艦でミズーリに向かった。調印式は九時過ぎに始まり、二〇分ほどで終了した。ミズーリ艦上の式典会場には、かつてペリー艦隊の旗艦が掲げていた星条旗が飾られていた。

短い式典だったが、象徴的な演出が施されていたのである。

また、二日夕方五時頃にマッカーサーは、アイケルバーガーを呼び、すでに上陸・進駐していた第一一空挺師団や海兵隊の兵士による暴行事件などについて話し合った。この日から、マッカーサーは宿舎を山手のマイヤー邸に移した。降伏調印式出席から鎌倉行き、夕方には横浜に戻り、宿舎を移す、そしてこの間にも布告文をめぐる日米の交渉があり、その報告も受けていたであろう。マッカーサーにとって、あわただしい一日であった。

四日・五日と、マッカーサーの動静は伝えられていない。ただ、マッカーサーと総司令部の東京移転の準備は着々と進められていた。三日には、マーシャルが東京に入り、米国大使館や帝國ホテルなどを検分している（『読売報知』九月四日）。

米軍部隊も続々上陸・進駐し、横浜



米国外務省での国旗掲揚式におけるマッカーサーとアイケルバーガー
(右) 1945年9月8日 (米国立公文書館所蔵)

市内駐屯の部隊は、九月五日現在の警察調べによると、関内の他軍需工場や旧軍施設を中心に二万四九〇一人に達したという(『神奈川県警察史』下)。この後も、横浜は米軍部隊の上陸・移動の拠点となっていく。

八日に第一騎兵師団が東京に進駐することが、発表された(『読売報知』九月六日・七日)。マッカーサーも、八日に東京入りして米国外務省での国旗掲揚式にのぞむ予定であった。アイケルバーガーによれば、六日夕方にマッカーサーと会ってこの件の相談をし、翌七日にはアイケルバーガー自身が東京視察を行い、その夕方に再び式典の打合せをマッカーサーと行ったという。

八日朝八時、第一騎兵師団の本隊は

相模原を出発し、八王子・府中・調布を通過して東京に入る(『相模原市史 現代資料編』相模原市、二〇〇八年)。東京市域との境にさしかかると、師団長チェイス少将以下、所属各部隊を代表する古参兵が車両を降りて、徒歩で行進して東京市に入るといふ演出がなされた(米第八軍「オキユペーシヨナル・モノグラフ」)。

一方、この朝横浜からは、マッカーサーの車にアイケルバーガーとハルゼイ提督が同乗して東京に向かった。一時過ぎに米国外務省に到着し、国旗掲揚の式典が執り行われた。この星条旗は、日本の真珠湾攻撃の日に、米国議会議事堂に掲げられていたものだという。また、この模様は米本土にラジオ中継された。米国の勝利の象徴的な場面ということであろう。この後、マッカーサーらは大使館内を視察し、帝国ホテルで昼食をとった。さらに、第一生命ビルを視察して横浜に戻る(『朝日新聞』九月九日)。横浜に到着したのは、午後三時頃であった。翌日、総司令部用第一生命ビルを明け渡すよう指示が出される。

東京移転

九日、日本管理方針に関するマッカーサーの声明が発表された(『朝日新聞』『読売報知』九月一日)。占領の目的は「軍

国主義および軍国主義的国家主義の根絶」と「自由主義的傾向」の助長にあり、日本国民に対し「不当なる干渉」を許るものではない、という内容の声明であった。

一方、一〇日には日本の新聞・ラジオに對する検閲が始まり、東条英機以下戦犯容疑者の逮捕命令が出された(『読売報知』九月二日)。東条は、一日夕方、逮捕前に拳銃で自殺を図る。重傷を負った東条は、横浜本牧の大鳥小学校を接収した米軍の野戦病院に収容され、治療を受けた(『読売報知』九月一三日)。

戦犯逮捕の動きに慌てた日本側は、三布告の際と同様にこれをいったん中止させ、日本側で自主裁判を行うことを望んだ。再び重光外相が交渉を始めると共に、近衛文麿國務相は一日午後五時に横浜の総司令部でマッカーサーと会談した(『朝日新聞』九月一五日)。さらに一五日には、東久邇宮首相自らがマッカーサーと会談する(『読売報知』九月一七日)が、交渉は不調に終わり、やがて東久邇宮内閣は退陣に追い込まれる。

本国では、マッカーサーの占領政策が手ぬるいという批判が巻き起こっている最中であった。しかも、この間に逮捕された戦犯は、横浜刑務所に収容されつつある。直接軍政は表面的には後退したとはいえ、日本に對する厳しい姿勢に変わりはなかったのである。

その姿勢は、東京移転にも現れている。

た。一七日に総司令部は東京の第一生命ビルに移動し、マッカーサーも東京の米国外務省に宿舎を移す。その後、総司令部の組織・態勢を整えて連合国軍最高司令官総司令部(GHQ・SCAP)が正式に発足するのは、一〇月二日のことである。

ところで、マッカーサーが東京に移る前の日、アイケルバーガーはマッカーサーと会って、占領政策について話し合い、いづれ第八軍が日本全国の軍政を引き継ぐことを告げられた。また、近々マッカーサー夫人と息子が来日する予定なので、その出迎えを依頼される。一九日午後、マッカーサー夫人と息子が厚木飛行場に到着した。アイケルバーガーは、横浜郊外でマッカーサーを迎えてから厚木に向かい、厚木で家族が合流した後、さらに東京まで一行を送った。マッカーサーの横浜周辺での足跡は、これが最後となった。

こうして、マッカーサーは横浜を去った。マッカーサーが横浜に滞在した一九日間、いわゆる「GHQ」の態勢は未確立で、占領政策も手探り状態であったが、横浜は占領当初に米軍と日本側が接触する場となり、その後の占領政策の基本的な方向性を定めていく舞台ともなった。横浜は、単にマッカーサーの一時的な滞在地に留まらず、日本の戦後史において初期の日米交渉の場となり、占領軍の態勢を確立していく上でも重要な役割を果たしたのである。

(羽田博昭)